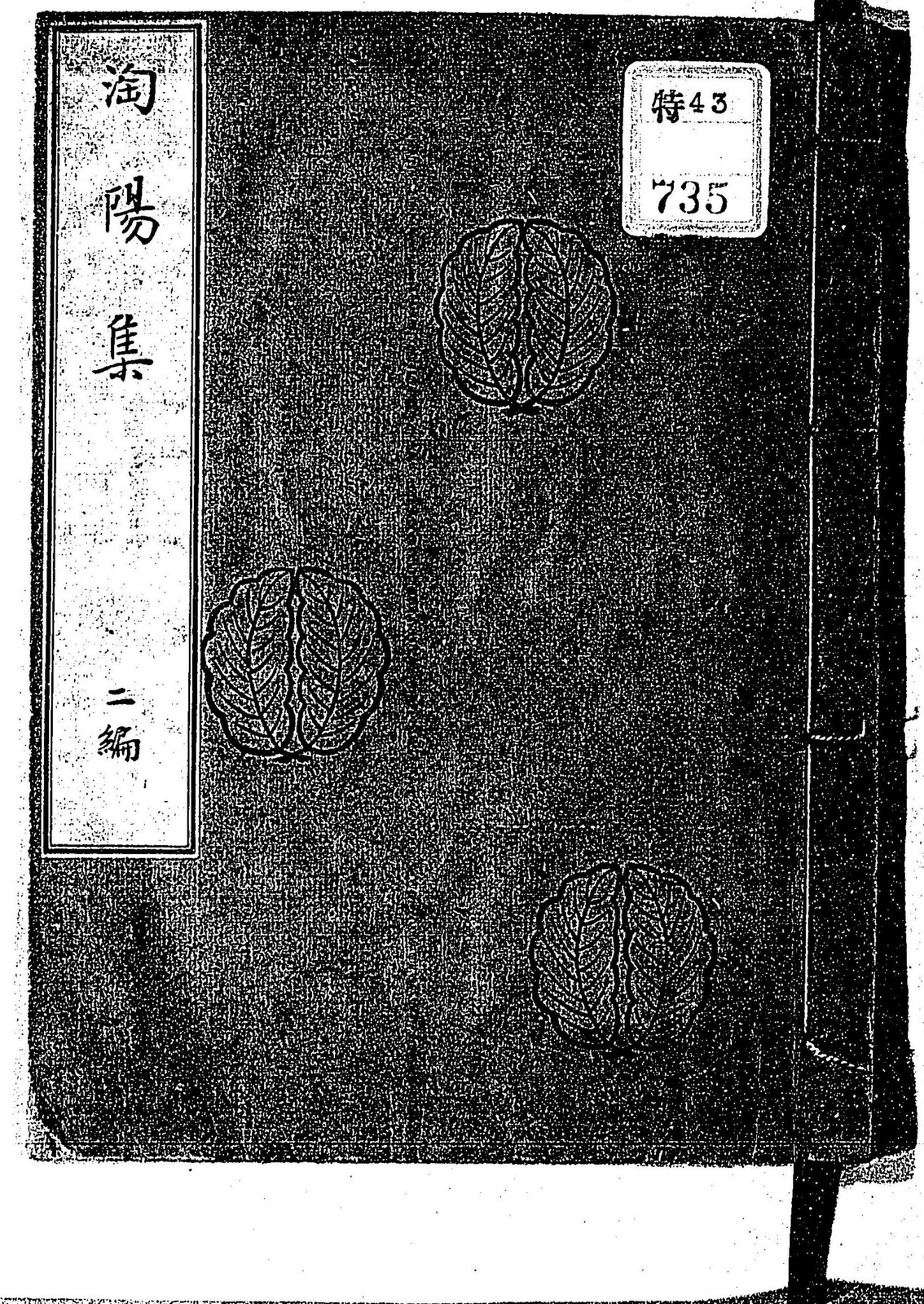


086360-001-1

特43-735

淘陽集 2，3編

原田 義方／編

M30

DBD-1148

特43
735

自序

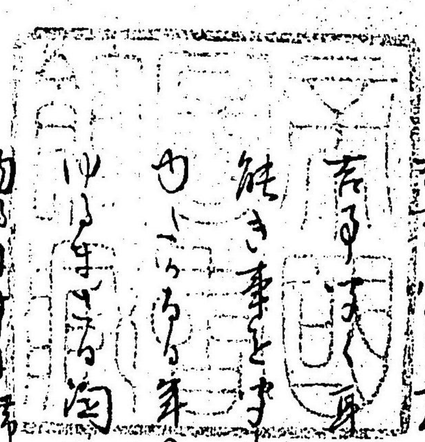
淘陽集初編成りて好二篇を台縄乃諸君な
呈せんとす此厚意誠に花葛庵乃
二篇吟成をかさうの上ともぬ色を深くして天柱
附ふ矣と堺一書生の
三千の祝ふ古稀の宵祭り
茅生なるいつる雨年

明治三十四年初夏

米花市陽
金龍老人
述

淘陽集二編

明治二十四辛卯年一月



吉事ハ永く耳永くの印の事ハ申すまでも遅き冥途の道
ハ行き事とハ永く耳永きの印の事ハ行ゆくさきの文月の末つかた
ハ行き事とハ永く耳永き印の事ハ行ゆくさきの淘宮
ハ行ゆくさきの事とハ永く耳永くとハ淘宮ハ行ゆくさきの事

ゆく年を変化なきも元旦の暦は利文天も迎め卯の年
早起きや二の坂まで三百と二千五日恢主ケ
好き主て学く耳永き卯の年よ我等の癖をとく法のん
ゆく年をしづかに言ふも月やそらさき
さくらと若ふる月やそらさき
ゆくとなく去年侍今年も日まぐ
子起ら匂ケ処ら初日の出
淘宮小世の教と別るを思して
三教や心学を他ら真人の淘法の跡を花よし
天理我歌

経なや北三輪ら二の神寶麿くい淘ケ徳の光りを
出山の釋迦の画を見て
師の恩を仰て勿恩
卯年の冨神を
迎ゆる神のゆくかな長まらんいゆるまでせのび手下うるこそ
運の旅たゝる内と暗かりの時ら肝要
機嫌よくこなの会を難なく我ら務神ふるら代物

月年一月三十一日中免會を終て

杉田の梅亭を雪より引移てより年と思し辰の日

日一月のそゞろ寒う降つゞく郷愁に感胃を枕て

久く〳〵と年うつゝ郷愁に感胃を枕て

柿の氏ぢゞの綿よ讃を乞ひて

亭の癖をかりつゝ洗ひつゝ日くるゝをものともせにしかも今日も流れん

淘宝川くり通ひ角ぐゝ郷ごゝろを

淘宝川ひつくり通ひ角ぐゝ郷ごゝろを

淘宝川ひつくり通ひ角ぐゝ郷ごゝろを洗てもまゝいやし

日二月十日紀元節の日柿の氏と杉田の梅を見て

行杉田とそまで梅を見て

安東雪と称る杉田の梅見ごろ

杉田の梅見ごろ

紅向ふ小庵と上戸の梅見ごろ

亭俳友ら梅の雪ら過きぬるまと毎きる十分の

花のほころぶを見て

杉田とそまで梅を見て

梅見連れ皆心花ら

妙法寺ら殊籬梅を見てそこら同じのそゞれ

のめり

香ふきも杉田ら実ぐゝ殊籬梅うぐゝ匂ひそ風のまゝ

雪ふるみちきうの妙法ら殊籬の梅や殊数の蕾ら

陽田川ら梅を見て

矛は過ぎ隅田川を一橋時私
エフレウの村を
過ぎ私ども一人を連
トロケの村を
過ぎて牛乳の温泉を
四月一日沼津より
若きまで終日雨
同六日
雨も霽れ
風ふきを

[illegible]のうち海の色まさやかなる心の花も四季ともある候
[illegible]花を一時開けば枯出せい心の花も四季を嬉しき
[illegible]の事を
[illegible]墨ともて直き富貴の花ときを開てさかり
澄と濁りの事
澄えい陰まい毒とる
枯枝の火がする
人のよき事をふやむ
憂き銀銭ハ鉄を
鑢鉄ハ刀よるず憂き
[illegible]

田の草が稲の肥よりも速の肥よ
り神の力よりが強くなる話と悟つて尽生に
宜く心のが能きいり能と人の知る神や佛の冥慮を
淘汰つて元堂をもつと神の石をしい数をかく写し
極楽や高天原を拝むと争陶祖の徳のもとある
陶者受天之真福
極楽や高天原も何家の只行き易き所也
雷門雅若
雅若勇気をもつて陶主い地獄も直ち参る極楽
大久保なる作ごとを是もして

栃栗ふもつごと参るものいつも我々段
日年五月廿七日の源の一団年の六月を以て四谷
敷寄る一刻院を法て陶家法量寿如来と
深き陶家法量寿如来と称名号を
門の南蛮一郷七日空をおこもり
雅者と皆一緒を問きて
多度も雅者とは花立生て全事さて奥の院
富士の赤色を見て
雲の等き度き事参るも陶けてさぐり晴天の不二
天地や空を元る陶主を参考や神座でゆくものてはし

打合の時合ひし後一ト和合て出来る淘玄の術

狂

此一字心を掛て修行せハ自然と叶ふ淘きうの術

同年七月二日飯田先生の名の胸を合字地獄

なるもの口示を思ひ出して

胸よりく蛭の地獄やめーの堀

町田氏の筆法をの玄淘玄の亀を掛ル舟の画を讃を

そゑて柳田氏より歌を乞ひ

有ケ谷や湊の芦舟のりもなきうの帆柱

同く磯辺の松の画を

根入ふかく堅固大事ハ好ム破迚の幹ハ雪霜

筆勢の枝と切ル事

此枝がらをひ切ル事を淘ケの所要よりそ

宮運と天運

宮運ハよくて有ル若ハ絶て淘て後の楽ミを天運

筆をものハもち迚ハ運の開く淘玄

淘玄ハ人の勿ぜる胸の玄淘ケを指ニハ只てきうり宮

成玄の若ハむる納さ修行ふりまゝ勿迚る真の宮運

胸の玄来を見て

よくて学ぶ玄文章で候ハ芳の作

同十月一日沼津より社中同祖の大祭をつとめ
本を経て帰宅して
宮を拝まで祖師御堂へおまいりし大先師の御
同の堂で法恩とひざく稽の音と天地感応をお拝み
御書のよみ聞かせや法縁の回しもち年
生て居るものの忘れもの日ごと機嫁ふえて働くより
天下和順日月清明
命と心おだやかに天下和順日月清明
沼津高橋定次郎子御入門入後年来好
き病を止め家内及親戚方の恩を感じて

利刀刃を潜る難を御
七難の昇城なり御
心の教に随て恩
の陰金と心得
金銀の事に何のとらわれ
同十月十五日の朝四
来れば時の面
ま宝品不残警察署
て巨細のご縁
利益を感じて

参考の日例の法で昨年十月陶て庚き武義父の妹のもと
同十一月十五日我宿高杉氏隠宅の我家を
新宅舎を修造して招永住の約束を定て
高杉の移る如来の色をみてうるべつきそめ君が我室
長善川町某田氏の七十の賀を
陶まて婚事の為金川屋吉締の祝よ増て賑遥
同十二月十四日八宮町小浮氏の我宅舎を招れて
陶ワ出宅運限りなくひくく小浮の仮の庵さを
高杉氏の我宅舎のほり礼状の末よ
廿年六参の紅葉も深く十一月よ筆をとれしく

同十一月廿七日橋町三輪氏の我宅舎よ
元と心陶の法よ和合して浪乃の生きこ輪の神垣
同十月廿八日午お八時美濃尾法の大地震をまて
天災をまぬかれ所の孫呵きこのおそろしくなりのよ
同十二月十五日三輪氏の妹と和次郎との婚姻
を賀一揃綿を送りて
陶まて我ら方は法をつくし綿や初こまして服八頭つくり
三輪氏の栄をいのり
栄くまし一様寿久の根分けあれ
天長地久

天の寿の長きを地も及て保つる処ゟ一陶玄の徳
神
関る事の忠孝を陶け冥々ゟ心の考ゟ天照神
儒
竹南ゟと陶の一字儒保ゟ書籍ゟくてゟ智恵
佛
竹事ゟ向ゟ理を知ゟ等一恵ともゟ唯我独尊
我ゟ別号を陶南事と名付陶玄の道のふひ
方を
生ゟ初ゟ終ゟ祖述ゟ名ゟつゐてゟ本の道ゟゟ

平沢氏ゟ大星天の画幅を得ゟ石版と刷
ゟ熱心の方ゟゟ送ゟ大星天掛を投知ゟ者ゟ
陶玄の大星天ゟ遣ゟ掛ゟ祖ゟ平河天神祭の市ゟ
十二月廿五日平河天神の画幅を得ゟ石版と刷
家陶の掛ゟ掛ゟ飾りまゟまゟ辰の日陶竹
山田堂次印ゟ外廻神乗掛ゟ開店ゟつき
陽祭をゟゟ能りゟれ神乗掛ゟ開店ゟ繁昌
明治廿五壬辰歳旦ゟ筆ゟ
先陰ゟ矣ゟゟゟくゟの年陶竹ゟゟ三五の的
おゟの我ゟ道ゟを陶竹ゟ外ゟゟゟ来ゟ辰ゟ

恩こ命の雲い淘ケてさ
馬雪の鳥こて日こ
機嫁こ刺〜後こ
塊て大的分い就阪よ
何るこそこ〜と紙
卯こ〜と月こ
頁ぬ雪を淘ケの方〜川
用ま〜る被の辰ま
馬雪の岬名辰の
就妙の杖こ動ケの新

ま雪こそ大的と異ひ辰の年的こ柳のそこりく
こそなど的こ明こ名
淘ケ生い今年いかそ
頁ん雪を淘ケこ智
生作て生ケで生馬雪
柳実ム根よみ実ム福
正直の日記と云ん動
十二階昇生いちこ
初為こまさこの
初こ阪ケ生一ま日の

金剛八日黄や茅の淘ケでく
永のだ行小淘ケて冬事の日永
時ぢ々若菜を摘や初日の出
時含る枝も若ぢ初日の出
先のを春て林刻も梅及ぢる
時ぢ林ぢ小ぢ小ぢ小ぢ神を
なる林ぢ時ぢ小ぢ小ぢ小

花もよるけよあり
時雨ぬるゝが淘の極正味成る程とりまぜん中
不霜着を苦
種ものを植ゑ六月雨が自然と叶ふをかが妙術
人もよび淘け一時の腹合ハ出現せ一ら不動愛染
振ふ穿ち出入の泳陀の利益をも気質の芝一房を味ハ
心花常春、
月よう角る花を一時のものめり心の花ハ四季を嫁ます
淘徳
草沈陽なかめ一ありがたき笑ひ見て命の洗ふくそのし

淘宝の意味を宮ふれる笑ふ
淘まのそ体ひやいるよんロまそ寝て勿一時ど
形もせい我ら処の座とるひさざ一のどくまけ淘をもん
人がそとりまよう安ん大をそのち此
淘

玉章をくりまかまし
形ちの出ざる時宝
かもつるものまものまて降ちけつる事形ちちき空
五月五日迎夏秀子初節句
腹まもの年そて男まそうき鯉室等の座る此間を賀

河上磯野氏へ金の事を送りて

其ゝ淘子の空も金欲と変化を事て昇る春年

暮九年の遅くとよふ歌を詠して

活如の修行とりもち今宵より俗事成ることの除機応変

安事を経営くり沖行なきを祈

老母を遣でる安事の経営や淘玄納の材るをうりて

前途在事資変化

受取る我ゝ行の癖を淘社ちり注来て天る恵まる

生て形て今事て今宵おぐんぐん是を高天のこゝの旅ひ

淘社ち約束ある好智如是教者の利益なり

淘けゞ四海は敬今

我ゝ子ゝ一字を好ぬゞ社の中よつゝ死ものゝし

辰六月吉沼津くゝ出発の時

雲まく沼津つゝの皆しゝ汽車て足ゝ富士越の於

馬車を見て

空を飛ぶのゝる車の馬ゝ和服の婦ゝ淘宮

今宵

今宵ハ運の程尊ゝ事仲ゝ淘りておきる所ゝ策

明の朱ゝ北の空心の朱ゝ天考てゝん運の能き方

今ゝ今日望日ハ明ゝそめ淘ゝん新し而ハ今宵沖り

猫

売の風呂の火焚きをはじめとして淘々の困る婦一さ
ゑ子ども病も未だ全癒せざるため何事も人任せとは
聖ならざる何ものの吹聴ん源く婦一人多の風
辰六月廿三日芝より毒の園居をお来して
ほゝえまし風ふきぬ芝の病数ぬうちこそ家なりけれ
後よ思いなるものあり
辰六月廿六日 老母より急用の
今宵とのまいそぐとて夜更ぬ芝るのかう
理屈をいわぬ
理屈ではなく地学の凝りは治らぬ
遠方の舎ま酒所く淘るの毎月多数り
今晩は何所の淘とて酔不ぬ宿がくしのが
淘ま我の周縁を直を術をかうま幸い
同八月廿四日石野氏根岸の転居を祭て
和かく変化の活よ石野氏新居の雪道
同日池辺氏より狮る舞の画ま箇吟ぐの褒を
恐ま申ましぬ時書物の営業を異して別る
第ま吹きも敲もきこゑひきそして淘ける服の乗さ
同九月廿日移れ氏の新宅を祭て

繁昌いよ〳〵幸をかけて賞めくゝ祖母頂の御丸のえせ
　月の光るなる今日よりよろづ人よつゝと收て
月の光るなる天地の中を人は住まつゝと富こ働く
　雪雨天つゝきの時
照り込む軒端の十五夜の月も住ける世作やき
　同十月五日旧暦の十五夜の月を賞て俳諧興行
ときを送る庭前も床も清て
　同十月廿三日大沢氏の家運を祝て松茸を送り
送る庭前も心月おや〳〵育十五夜
　同十月廿三日梅氏の宅へ初て訪ひて
梅深く来ん軒端の月の友
　同十月廿三日大沢氏の家運を祝て松茸を送り
松林幾よ労せん大沢氏の家運を祝て松茸を送り
　梅深く来ん軒端の月の友
梅深く来ん軒端の月の友
　玉友久の花の宴を賞ん松林を魁まして
玉友久の花の宴を賞ん松林を魁まして
　かくまで同一境ある千代の寿を永き世の為ん
かくまで同一境ある千代の寿を永き世の為ん
　門入のくゝ
門入のくゝ
　門入をまつ先を蛙一経有一句の一字我ら物まして
門入をまつ先を蛙一経有一句の一字我ら物まして
　嫁入のくゝ
嫁入のくゝ
　松茸を見ながらの寮ら淘汁の一字かまる貴こんぞ
松茸を見ながらの寮ら淘汁の一字かまる貴こんぞ
　山口氏へ

沖ゐる淘舎の道をもとりて自邸より運の登る山口
十二月二日用事簿道の川向より物のつゝみをみ
神ゐ門松さんとをりをみて
淘けふ自邸を留守して淘け安神ゐるのをりつけ淘け
細井氏く訪ふの附
淘けふ細井ゐ小の冨平おて世ゐ喪くおて座ゐ度ゐん
いさまくおてくお蜂一年の暮
振をりふ写ゐ月日ハ辰の年又成ゐ暮をゐ己のをる
二十六年一月
多る年の五穀をおりてゐゐ愛なき筆を以て己の出

淘けて清くひん能き投ゐて妙音天のか護をゐゐや
ともかくをふ写ゐいつゐ辰の筆りふてゐ己と成春ハ来ゐり
光陰矢ゐまく辰の年りふをゐるの春を迎て
吐年ゐ既ゐ多つ己と祈り今雪ゐ迎ゐん為め大吉
かくつく猴好の念を好ぬハ思ゐん強ゐ為物大吉
吐ゐとて四方ゐ多くくゐ物の出年ゐゐる己年て愛ゐ啓ゐ
愛の写ゐ月日りつゐ辰の筆所望を折て一陽来福
冨く年ゐ己とゐる出を迎くり好く淘て運をこめさん
正直の的にこゞ淘けゐ若き所ゐて通ゐ己の法
成ゐ年を冨く清年ゐ力堆天の岩戸を明て己の出

正直の的をそらさず掛けなば矢先の通ることのとし
おのが身も六根清浄と唱ふれば心をかくさじ
おのが舟も六根清浄と漕ぐ後の
老ぬ此と月方に悟しぬ後の
浮き出る泡を掬ひあとよきを
掬ひ取り皆大吉をこそ
月の光に心地よく別るる初かの
掬ふ手に掛て掛りや花の
己の念に掛るかそる苦かつ
念の組とけ袋を掛くる手に琵琶乃妙音

安井信よ

千金を買つぬ掬ひの一字こそ好事なれ一生のとく
同二月廿二日宮戸氏令閨の齒齊を祝して
時ならぬ遅て咲くや梅の花
金をつゞて出ぬ時ハ彼の門ハ免の周防のうめるさ
我が家を心の鏡にて己ハ仰ぐものにむちやうまれ
家をも忘れ在運の郎ともなる
潤る水解ひほどけひろ水和合て男をもつ掬ひ
宝と金の外に今一つ掬ひの一字金と買ひぞ

宝る余は陶ケの一字又なるべしと
同年陶紅之介六の日宮入て
五年ある之介六の巳とるぬ宮ぬ陶ケ跡をおして
刑運の元心の楽るありるのすし示し陶云ふ義
同二月廿八日甲る棟先年ふく
年運の易会いまし別るもの床の柱も等物大吉
同四月三日神武天皇の祭日雨の大雨牡時せ我
用ふいまし日の外の神武祭おすの用ふ宮ふ同りふ
同七月年財天る詣りふく
古くを振り返り巳の今宮ふ七事有年時を江の為

世古氏へ

陶ふ柱を直る宮ふ有ふ
同月十三日翌年人祝の時

師の恩ふ為ふ修行ふ我弐年余ふ宮ふ社中の致

和合五陶

天運のかるせなまふ祝ふ
陶て霊妙所ふし
り事祝ふ師ふ宮ふ
数の白奥を以て
うく其ふれの意を

き

海潮一尺の高さの添けしかバ白奥の数
海より深さ六尺の高さにうち計まかりきたる奥の数

同五月二日比田間の橋杵を見て

鉾毎よ山丹精やさみ下杵

抱きの蕗の蕾とやさしく深く咲よる丹躑

同

花の形弁才天をまぢ今年八爰ら巡る巳の夏

丹躑八花の姿形よこの弁や物多弁才天の五細工

淘ふ向きよ仏のごやきてぬけや咲んこはの脇の外

同五月町田氏の家を

安まるふ乱念うきふ神の加護白蛇の姿よ巳のと

同七日亀戸の藤を見て

咲りとうふ春ふ藤の花

藤棚や藤や牡丹や五車宝来の尽ふ運ふ来て

筆ふれバ多つ二すハなでふ初のまゐの人の多ふ繁昌

植文ふて

丹精ふふ繁昌や富貴杵

同廿六日母の一周忌を取越て

線香の煙りふふ月日ふ一年ふ姜の今宴

同六月三日沼津に出立同六日迄同三島迄を
漸して七日伊豆の修善寺へ出立午後四時過
戸井平八方へ着八日逗留傍を北条へ十一日沼津へ
戻り十二日帰京
七福の神おしゃりふざけてて服ハ着福
仏法のようこの湯は運動ハ程々ゆやで歩行ふん
元久の昔一を思いで湯ふ皆拝れふて帰家
七郎が即めつしいふの名物焼へ松一と福食傷ハいや
淘宮て彼を好ふ勿の養外錬有賀の息ハりづの修ふち
同七月京都松島迄を思ひ立て同十七日東
京出発同廿四日帰京貞雄行中廿日鈴仙墓
福録氏宅方より久くおて時々を学ふ多し
向ふ山を見而ふ谷川ふて流ふる鮎漁をふを
庵くの宿ふ着時ふふる若葉とそふて
松島ふ
俳とふしまて八日霧の能き日和心ふ晴てれの為ふ
松島巡りふ船中ふそ初ふを見て
天地の恵ふを深一又庵ふ島巡りつふふる漁り
同
難有や財世の限ふ任せつふ永ふ年き帆ふ巻ふ松島

家立寄ようやく仕うて松島の景色を添て月と共に
汽車の便伽羅で名高き仙台へ約下致ずそりなく愛
柿内氏桃を御の厚
我が家貧とりまる少なき毎日本一の日術
日雪のうさぎの画よ
帰し列て梅初てゆるね陶げてとゞみ残る九盃
日八月二日内藤家の
会ちく話せい暑さワキ少き思こと乍ら日くらしの
日五日昼飯よ
幸望ることを知らせい経有ら冷の如き部屋の掃
日七日発車と乍て
地して盛り経うき約束と
日八日雲口蟹川橋そして車の揺り時
さまし蟹川橋て車の歯さ
日十一日乃帰京ふて
田中より海乃味しのうまい鯖来也会と移ようり
日十二日渡辺氏の如産る万工を送ら事乃如
ちゝ母は病て寝る流山乙の大きよ緑の一万工
日十五日旧暦の四ちう
月々ふ弓矢の神の祭りかな

月

午神の祭礼矣汔乃の月

長谷氏の玉の両よ

ちの御ものへをねぶ只の玉

貴一へ不動愛藻の心を示て

萬名記きうべき理ちうて

是よる学くて午き極楽ハ出来ぬ御ります天のつ刻至

日口八日貴一東京を出立ち生の翌日九日のお門ぶけき

月を泳め今宵ハ金ヶ崎うち来私うんと何と

う御神の心を

布うまうまうけき月の今宵ハ金ヶ崎うそうんん

日九月五日三島町世古直通氏ハ

門けるハ向ふ心よ量りうき穂ぬ孫ぬ妙法の二字

日吉祭国仁平氏の姉孔雀

煙草でうけもハ息のほ陰うき

高橋政ようち細工の物を遣ハれ生ハ

祝宮く生白梅ぬ別うべ集ハ遣ハうの御のうちの日細工

日十二日村尾氏の孔雀

情ぶうんうき風のこぼれ葵の形者の写うを示き

仙台福錬氏の朝臣

葉の数より多き歌ひとつもなし

赤き陶器を

線香の丈より陶器の寸法と知つて歩を移す

人を殺す人をそしりながら我をそしりおのれ直き笑の陶器

人をさるしをかりながら我をそしりあきを直きの陸

仙台初孫氏の朝歌二百十八種あり

外歌の歌のめくるめくるまで日く〳〵多を収ひより

俺ハ宮城知下よ呼ばしく歌を思入谷の夫のり細工

芝居をみるより多く宝の紛失まどより

我ら夜もかくやねんと

池内せい子なる賊のごとく紛失

同十月二日大宮氏の三女婦ハ月知友くの三の主赤千代君代す當山繁昌

正直の生人が立田の修行ハ新よ如きの歌る憂ひ

陶げつおまを中夜

若一切るらぢん修行ハいつ二のかまを

上を見て大きな望をいつ二の陶玄関の上を見守へ

落葉まる事を支度の楓つる

陶るハ我ら精神の日本武臓悔の根葉ハ草薙の火勢

正直のかくべよ神ハ宿るより正直まる事ぎまし

初冬を待て
初雪の今年も去年を音つる
同八日九山氏の茅屋に
九山の淘の賀本屋きぬ
淘ケつゝ決着心ら彼の
逆井ふて
淘ふいしつくり返を
明治廿七年元旦
ける時一句申て祝て屠蘇雑煮の恩愛な春ふの
淘言翁

淘ケ悲いのきも紙きる實翁が午の春をそむの日出記
愛まやく紙ひとやかて
いさゑも財ぶる年の
乃の癖の放き安きの午年も淘けの鞭て
愛まさく年も打ず春的の
淘宮ゟ本卦返りの年の
又
会せ地放き的まち
年運の財保て句ふ梅の
雨運の初荷車や春の
駒

夢をぬ年ぬ近くて来の酌
宰運へとゝなるまで甲の年
元貨て仲てつくせ年の去
て旗も恵方へ馬車の初日哉
爰の宮よ今年とゝぬ来の酌
祝ふ花馬よ綿の上くり
宰く門恵方へ午のまゝろ
一月九日ウ門入初よ
宰運の如く午初や午のまゝ
宵ゝも花散さでも春駒よ
春ゝう放ゝうゝる宮の廊を淘けて行る年の年神
同二月廿一日旧暦二月十六日淘祝る師を拝して
今のよ師を招ゝてよ星ゝて
宰運の道の戻きくゝう出さん本卦返る年の年ゝて
村おいまゝとゝのゝとゝよ文開け好ゝて時の年 年
同廿四日山口氏へ
一心を服よくゝるがかる矣ゝう正直勇気落付のもと
宰運の道ゝ不廃く乗出ゝん字付一年の年ゝ今爰
同三月九日銀婚式の御祝を賀一なるの心

て八九十の三りを祝して

銀婚の門式目出なき日の本と呉国まで聞くちん

お互ひ所今の紙ひが紙ひの字向ふ迄て云ちよ

苹洗ひ物よ池さすめ一晴くもぐる雨人のなな

火心小歌を神と云陰陽和合ちをち本歌

古池やのご詠を

吹酒をめ明よ息のもる音

假名

とくの假名よざを打ていどごとるまごろ地の弟あるハ天気

跡生を思ひ可惜れ好をして此運を労して功なし

四月十五日

東加藤清正孔子祭一昌知ごごさび指一能ハ所

内藤家ず牡丹をお来一て

名を侍て大きく咲ケ富士山

大場る家くて能ケ富士山

同五月十七日西国松枯淘所今年延ぬ

天気とうろしも

曇りるや天の恵くやや五月晴

庭生ま苔つ一彼岸衣涼一と知ぬぎる粽ちん

玉よ巳の贊

陽炎の雲井の空も詠りて暖かの念ひしるき大吉

暑中よ

生て居て孝子と呼ばるゝ暑さかな

暑しとおもふ心をおもひ払ふ扇かな

不二詣龍の画を見て

淘三男許金就不二詣城一只為二画龍一

ふじ山の立ぬ日の空の暑さかな

十月廿二日天理

ちりと降て行く天理の雪

日清事件を賀一出張先へ送る

○

牧氏の需より春之を師の許に

表する文章を過る明治十七年六月廿一日の

事なり牧氏の夫婦は門入後革院資金の日春三

月師へ赤飯進呈の時を差上る書状なり返事も

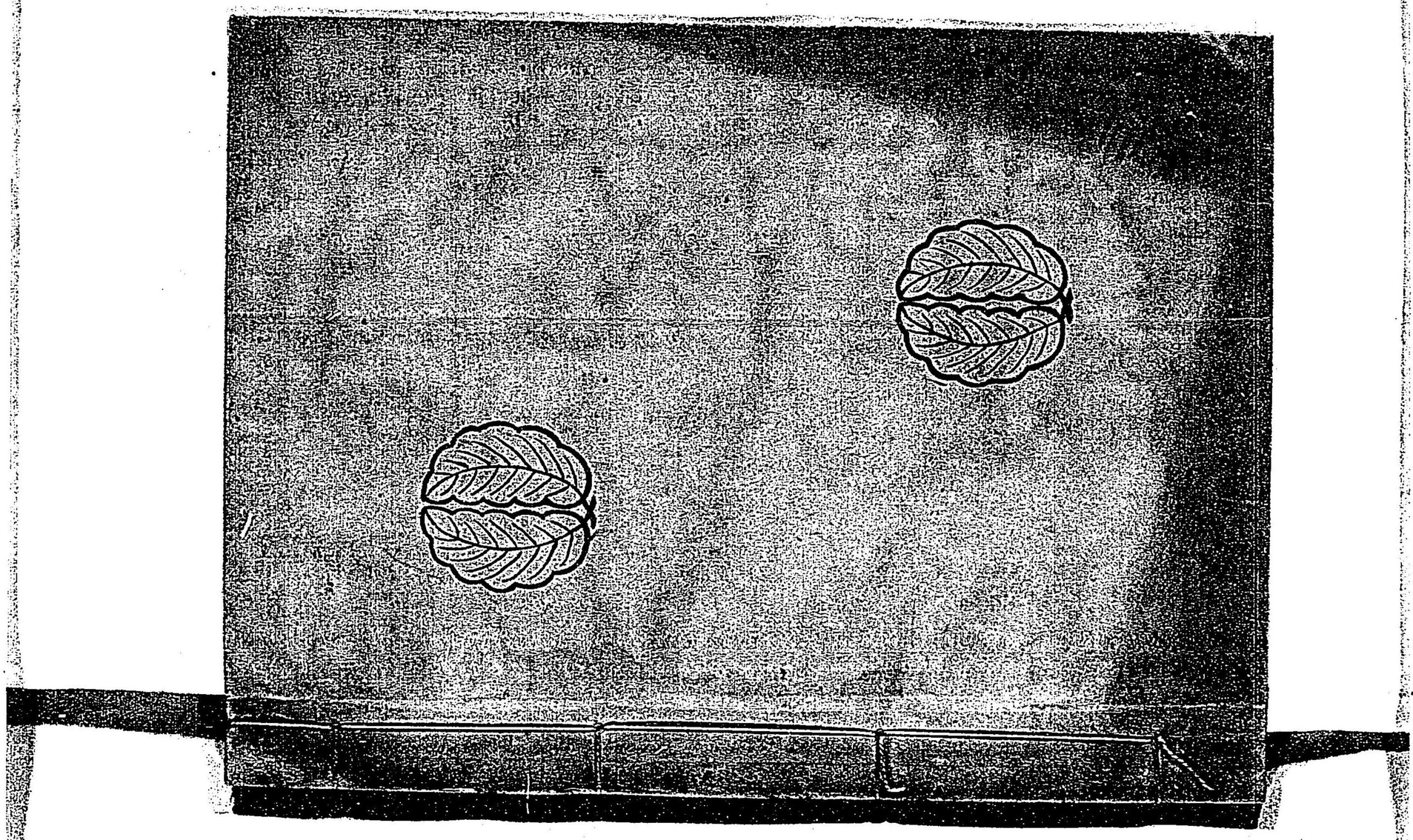
まもなく今日川瀬き伴し参り例月一金を得さる

事金くの孰んのうち所望して行ける後永續すべく

こゝを思しめし被下る事を

時契約の通る一字を守るべく

明治三十年七月十日印刷
同　年同月十三日發行

非賣品

發行及印刷者　東京府士族
東京市牛込區南町卅二番地
原田義方